

# 「消費者教育モデル授業」2年間の取組を振り返って

公益財団法人消費者教育支援センター 総括主任研究員 柿野成美 氏

## 1. はじめに

先生方と初めてお会いしたのは、平成28年7月初旬のとても暑い日だった。先生方はこの機会を前向きにとらえて、ご自身の授業を見直そうと意欲的だったこともその日の天候以上に記憶に残っている。この2年間、四季折々にお会いし、実践の状況をうかがう機会をいただいた。先生方を通じてその向こう側にいる高校生たちの生き生きとした学びに触れることができたことは、私にとっても貴重な時間となった。ここでは、今回収録されている消費者教育モデル授業の内容について、簡単ではあるが其々にコメントしてみたい。

## 2. 各実践内容について

県立神戸高等学校森和代教諭の実践は、『もの』を作ること、作る過程を知らないから、『もの』が大切にできない、捨てればよいという短絡的な発想になっているのではないか』という本質的な問題提起が根底にある。それに気付かせるために、廃棄処分にせざるをえない制服・シャツの端切れを使って、手縫いを中心にしたマチ付ミニトートバックの制作によって基本的な技術を身に付けると共に、そこから発展的に作ったトートバックを一つの作品として評価し、製品と価格、リサイクルとゴミの問題など、消費者としての観点や環境に配慮した取組などに視点を広げている。また、生徒たちは他教科での学びを関連づけ、「責任ある消費者」を考える総合的な学びを実現することに成功している。本実践は、被服分野の制作の時間を消費者の学習に関連づけた内容であり、家庭科だからこそできる奥深い学びになったと言えるだろう。

県立夢野台高等学校阿部恵子教諭の実践は、消費生活の学習を家庭科各分野の学びに関連付けて、領域の枠組みを超えて年間を通して計10時間の内容とした点が一つの大きな特徴である。小単元①「変わる社会と時代の流れを知る『人生の先輩から学ぶ持続可能な社会と生活』」は、人生の先輩である高齢者からの聞き取りからどのような生活やライフコースをたどってきたか「人生年表」を作り、そこから高齢者に寄り添いその立場に立って考えることや、時代の流れを体感し過去から未来へと繋がっていることなど、持続可能な社会を考える上で基本的な資質を身に付けている。また、小単元②「持続可能な社会の維持をめざして『世界の片隅で起きている事と私達の生活』『Need と Want エシカルコンシューマーとは』」では、日常的に菓子等に使われているパーム油と熱帯の原生林破壊（ボルネオ象の生存）とのつながりについて知り、消費者としての責任について考えさせる内容になっている。特に、これまでの経験に基づく指導方法の多様性には目を見張るものがあり、例えばエクササイズ「直径1.5mサイズで捉える地球」などは、体感的に理解できる優れた指導法であるので、ぜひ授業で取り入れてみたい。

県立神戸甲北高等学校塩谷莉菜教諭の実践は、消費者庁が作成した教材「社会への扉」と兵庫県が提供した県内の相談データを活用し、高校生自身の調べ学習を取り入れた、基本的であるが応用可能性が高い優れた実践事例である。今後、民法改正成年年齢下げにより18歳で成人となることから、高校時代から消費者トラブルが懸念されており、それに対応するためには、生徒自らが自分の問題として考えること、また自分のことだけではなく、社会全体で消費者被害を減らすために、

どのような行動が必要かを考えることが重要となる。塩谷教諭の実践では最後に川柳をつくって共有しているが、このことは自身の知識を定着することに役立つだけでなく、教諭も指摘するように周囲への啓発活動へと繋がる視点を持っているだろう。パワーポイントの資料も充実しており、参考にしたい。

**県立伊川谷北高等学校中村真理子教諭**の実践は、学校設定科目「生活実践」において食生活から「エシカル消費」を考える意欲的な内容となった。フェアトレードの学習をした後、調理実習でチョコレートブラウニーを作るためのチョコレートを生徒自身に購入させたところ、実際にフェアトレードチョコレートを購入する者はいなかった。この事実は結果的に、この実践に奥行を持たせることに繋がった。すなわち、「フェアトレード商品を買わなかった理由と改善点」を改めて生徒に考えさせる機会を得たからだ。売り場に置いてなかった、高い、なじみがない、生徒から出された意見はどれも納得するものであり、この状況の中で選ぶことは難しい。消費者には選ぶ権利があるのに、なぜスーパーに置いてないのか。日常生活でのジレンマと向き合い、答えは一つではないことに気づいたり、その課題解決に向けた行動につなげたりすることが消費者教育の本質だと言える。本実践はチョコレートを題材に、生徒に対する様々な投げかけを通して大きな種まきをした事例と言えよう。

最後に、**県立伊丹高等学校萩本三千代教諭**の実践は、消費者としての自覚を促し、よりよい社会の実現に向けた消費者としての役割を考えさせる優れた実践である。萩本教諭の実践は、まず一人で考え、グループで話し合い、皆でよりよい答えを出していくグループ学習や、家で調べたことをグループ内で共有するといった探究学習など、全体が生徒の主体的な話し合いを中心に組み立てられていた。それを効果的にするため、グループごとにミニホワイトボードを活用する等の工夫も有効であった。また、学習した時で終わらせるのではなく、生徒が自立した消費者として必要な項目を設定し、年間を通じて自分で5段階評価を行っていく手法なども非常に参考になる。また、生徒に対する課題提示の方法が優れており、生徒自身も「内容が身近で考えやすかった」という感想を寄せている。その一つである「消費者の自由」を考えさせるイラストも是非活用されたい。

### 3. おわりに

公正で持続可能な社会の担い手を育む消費者教育において、これまで学んだ様々な知識を総合化し、実践的能力を育むことができる高等学校家庭科の役割は非常に大きい。本稿で提示された考え方や手法等を参考に、これをご覧になった先生方から新たな実践が生まれることを期待したい。